

による機銃掃射で、山野であるいは強制労働で命尽き、悲運にも異郷の地で鬼籍に入った戦友たちに、私は命永らえている今、何をなすべきか自問自答せざるを得ないのである。また哀惜の念断ち難いのである。

### 【執筆者の紹介】

現住所 岩手県釜石市鶴住居町一五―五三一八  
生年月日 大正十三年四月十五日

昭和十四年四月、新日本製鉄株式会社釜石製作所入所。工作課仕施工場に旋盤見習として配属。

昭和十九年九月現役召集、千葉県にある野戦重砲隊に入隊。十月満州東満地区西東安第十七野戦兵器

廠二六三四部隊（き）中隊に配属となる。

昭和二十年春、牡丹江に移動する。

復員後の略歴

昭和二十三年復員、入隊前の原職に復帰。職場委員、

中央委員。

昭和三十二年専従執行常任委員。昭和四十二年九月

仕施工場復帰。その後支部長等を経て、昭和五十四年六月末日退職。

家族構成 夫婦、長男、嫁、三人の男孫

現在の様子

- ・岩手県釜石市老連理事
- ・市老連鶴住居地区協議会会長
- ・市老連鶴住居清涼クラブ会長
- ・全厚連釜石分会事務局、地区評議員
- ・釜石ふだん記の会会長

（岩手県 田辺 壮久）

### 敗戦国民の償い

福島県 大室 清

昭和十七年、尋常高等小学校高等科二年生（今の中学二年生）の秋、海軍志願兵募集の呼びかけに応じ受験して、合格となる。翌昭和十八年五月二十日、普通

科電信術練習生として、神奈川県は久里浜にある横須賀海軍通信学校に入校した。満十四歳と十カ月の春だった。翌十九年三月同校卒業、千葉県の館山航空基地に駐屯していた九〇一航空隊に配属となった。以後、九州は大村航空基地を経由し、台湾の東港基地へと輸送用海上機にて派遣された。東港基地では数十人の戦友を失う空襲に遭い、戦争の凄まじさを体験した。派遣隊の移動に伴い、上海基地から陸行で中国大陸を横切り、北朝鮮は元山航空基地に転勤となり、ここで昭和二十年八月十五日の終戦となるが、南下して来た羅津部隊と合併して、司令官が「あくまでここを死守する」と変な意地を張り、まごまごしているうちにソ連軍が上陸、交戦もせずお手上げで飛行場に全員集められ、危険物は全部取り上げられた。

飛行兵たちは気配を察して、ソ連兵に日本人の魂の軍刀を渡してなるものかと、全部集めて海に投げ入れってしまった。意地の抵抗であった。

どこに行くともなしに、マンドリン（丸い弾倉を載せた自動小銃で弾丸は七十数発飛び出す）を肩にした

ソ連のソルダート（兵隊）に監視され、ダワイ（はやく）ダワイで歩き始めた。

いったん富坪<sup>フシダ</sup>のラーゲル（収容所）に収容された。電気の通ったバラ鉄線で囲まれた丘の上にテントを張ったキャンプ場のような所だった。何日か過ぎ、毛布に潜り込み寝ようとしている時だった。隣のテントがいやに賑やかになった。うるさいなあと思っていた矢先に、バンバンと銃声が聞こえ、隣のテントが騒がしくなったので行ってみると、一人の兵士が、ソ連兵の撃った銃弾で腹を射貫かれ、即死状態の事故となった。すぐロシア語の堪能な若い将校が駆けつけてきて、さっそく交渉に行くことになった。「誰か一緒に行く者はおらんか」と呼びかけたが、今、目の前で起きたむちゃくちゃなソ連兵の発砲を見ては同行する者はおらず、私がすぐ脇にいたので、ままよと名乗り出た。提灯を持たされ、将校に「右手に持つ軍刀（将校だけが刀を持つことが許されていた）がよく見えるように照らしてくれ」と言われて、神経を使いながら将校の脇にぴったりついて静かに静かにカンポイ（監視兵）に近づ

いて行った。「ストーリー(とまれ)」と銃口を向けられて、「イジシタ(どこへ行く)」と詰問され、それに答えて、鉄条門の外へと、ソ連の責任者のいるところに連れて行かれて談判となるが、私にはロシア語がわからないので詳しい内容はわからなかったが、結局は「今後このようなことのないように」で終わったようだ。原因は、隣のテントでどこからかアルコールを手に入れ、それを飲んで少々浮かれて大声になったらしく、ソ連兵はまた、その騒ぎを暴動でも起こしたかと恐怖心もあり発砲したとのことである。ソ連兵は後先など考えず、いとも簡単に発砲するし、捕虜の命などは虫ケラほどにしか思っていないのだと改めて認識し、自覚することになった。

興南の港よりダモイ(帰国)ということでは船に乗せられ出港したが、左手から陸が離れない、これはおかしいと皆が騒ぎ始めた。ナホトカに荷物を降ろして、それから日本に向かうとのこと、半信半疑だったが結局は嘘であった。マンドリンで脅されて下船させられ、貨物列車に詰め込まれて数日、いつ止まり、いつ

発車かわからない汽車の旅、また何時間も動かないときはソ連兵がすきを見て、「ダワイポコパイ(交換しろ)」とくる。交換ならまだよい、恐喝、略奪、特に腕時計、万年筆などは目の色を変えて持って行こうとした。途中「赤飯が出たぞ」と大喜びして口に入れたら、ポソポソの高梁飯でがっかり。おかげで腹をこわす者が続出して大変だった。

着いた所はサンタヘーゼ第十四收容所という所で、見渡す限りの平野だった。遙かあなたに湖(ソ満国境の興凱湖と聞いた)が見える所だった。朝は地平線から二、三メートルもあるような太陽が赤々と顔を出し始め、三分の二くらいにもなるとポコンと飛び出すように地上に昇る。また沈むときは、三分の一くらいになると急にあなたに引きずりこまれるように姿を消す。大陸ならではの風景である。翌日からはもうラポータである。

捕虜には休みはなく、動物並みの扱いが始まった。まず朝の人員点呼があり、これまたその知能程度の低いには驚いた。ソルダート(兵)はもちろんナチャ

リニク（監督、管理責任者）あたりでも満足に数をキツチリ数えられないのである。まして掛け算などをできる者はおらず、日本では整列は四列に並ぶが、ソ連兵には四列は数えられないので、ペーチ（五列）ペーチと叫んで五列に並ばせ、十、二十、三十と数えていく。途中列が乱れていようものなら、さあ大変、前後の区別がつかなくなり、また前から、十、二十、三十と数え直すからその時間のかかること。その愚直さにあきれながら、零下四十度の中で足をバタバタさせ、

「ロ助（我々はロシア人をこう呼んでいた）のヨッポイマーチ（この馬鹿野郎）、ヴィストラナード（早くやれ）」とぶつぶつ苦情タラタラ、毎朝の苦痛の時間であった。

作業は稲刈りだった。遠い北の地の零下四十度からの寒地で、まさか稲刈りをするとは夢にも思わなかった。なんでもドイツの捕虜が作付けをし、どんな理由からか刈り入れできずに引き揚げた後だった。気の遠くなるような広々とした田圃の水の上に、チョコンと穂先だけを出している黄金色の稲穂を、刃渡り六十セ

ンチくらいで長さ二メートルくらいの柄の中間に取っ手を付けた草刈り鎌でガリガリと薙ぎ払い、それをフォークでとどこころに山積みして置き、モルチルカという脱穀機に放り上げて籾と藁とに分別する。食事情は最悪で、初めは気力で働いていたが、寒さと飢えで作業のできる体力ではなかった。捕虜という立場では、動物並みの扱いに苦情を言っても通らない。「ダワイ、ラポータ（さあ働け）、ブイストレ（早く）」とハッパをかけられる。それでも籾米を扱う作業だから自分で食を補うことだと、初めのうちはカンボーイの目を盗んでは籾米をスコップで、焚き火に乗つけて、炒り米にして、満足に穀の取れていないのを口に放り込んで食べた。翌日のトイレは、米は完全に消化され、血のついた籾殻だけが排泄されている。そのうち馴れてきて、缶詰の缶に籾米を入れて棒でコッコツと精米を始める者、作業現場に行く途中のザボール（塀）からコソクリートを剥がしてきて、二枚すり合わせて精米する者と、それぞれ工夫するものである。それもナチャリニクの目を盗んでの仕事だし、見ても知らん顔で見

逃してくれるカンボーイもいれば、ナチャリニクにおべっかをつかい目を光らせているわずらわしいカンボーイもいる。そんな苦勞をしてズボンの中に流し込んで

持ち帰り、仲間とストーブで飯盒で煮て食べることにするが、たびたびソ連兵が視察に来るので見張りをつけて、ソ連兵の姿を見ると「空襲警報」と怒鳴る。バタバタ片付けて知らん顔でよそごとをしているように見せる。そんなことも初めのうちは通ったが、敵もそんなに甘くはない。ついに見つかって警戒が厳しくなり、帰宅時のラーゲル（収容所）の入口での持ち物検査が徹底的にされるようになった。せっかく骨折って精白した米も一〇〇%取り上げられる始末。ある日いつもの徹底検査で、腹から両足のズボンと数人でパタバタ始まった。私は約二升くらいの米の入った袋を頭の上に掲げて検査を受けた。ソ連兵は夢中で下ばかり検査して頭の上までは気がつかず、無事持ち帰り大笑いしたことがあった。稲穂の山の中にはところどころに野ネズミが巣を作っている。これを見つけたときは大騒ぎである。フォークで追いかけて回して捕まえ焚き

火で焼いて食べる。米を食っているヤツだから、小鳥のような味でうまい。カルシウムもとれて最高のご馳走であった。

こんな稲刈り、初処理作業も終わり、次に田圃にするための側溝掘り作業が始まった。考えてみれば、ただ、だっ広い原野に稲穂が生えたような田圃とは言えない田圃であった。日本人の農耕作者の知恵だろうと思われる田圃用の側溝掘りである。幅二メートル、深さ二メートルくらいの形に掘り下げる作業だが、これまた大変な仕事である。零下四十度、五十度の寒さは、地下も一メートル五十センチくらいまで凍らせている。カイロ（鶴嘴）で掘るのだが簡単に掘れるものではない。ソ連の共産主義には「働かざる者食うべからず」という徹底した主義があり、これに忠実である。働くこと、すなわちノルマの達成である。ノルマの達成率が食べ物に影響してくるのである。このノルマに關しては、体力に等級があつて、それでノルマの内容が違ってくる。たとえば一級（ピエロイ）、二級（フタロイ）、三級（ツリーッチ）とあり、一級は一〇〇

%、二級は一級の八〇%で一〇〇%達成、三級は一級の五〇%で一〇〇%達成となる。四級(オカ)は栄養失調で、五級(ペイペイ)が病人で、四、五級はニアラポータ(作業なし)といった具合である。では等級はどうして定まるか、これがまたお笑いである。ドクターが頭から足の先まで見下ろし、肩の肉をつまみ、尻の肉を引っ張る。ただそれだけで等級がつけられ、ノルマが課せられるのだ。コニーアジナーク(馬と同じ)扱いである。

しかし、この制度もあながち不合理とも言えないのかも知れない。食事は、主食が黒パンであり、ノルマによって量が違い、一〇〇%達成の時は三・五キログラムの丸パンが支給される。これが十等分に分けられる。ノルマが悪いと二・五キログラムの角パンとなる。そのノルマも「側溝掘り」という体力のいる仕事のため能力が上がらない。とにかく、表面の凍った土を掘り下げるのに苦労して、夕方までに下の軟らかい土まで掘れないと、明日はまた同じ苦労の繰り返し。軟らかいとところまで掘り下げれば、あとはロームラパータ

(スコップ)で掘れるので作業もはかどる。だんだん要領もよくなり、ノルマも上がってきたが、食糧事情はじゅうぶんとはならない。夜は寝ると食べる夢ばかり見た。

ソ連人の労働力は男も女もない。女は主に機械関係のラポータに携わっている。ナチャリニクで十八歳の女の子がいたが、こちらが夢中で作業をやっていると、番兵とイチャついている。私の見た限りソ連という国は日本人では考えられないほど、性に関してはルーズである。貞操観念などはないに等しい。もっとも子供ができればスターリンの子であり、私生児はすべて国の施設で育てるのだそうである。

春になり、氷が溶けて冬期中に掘った側溝の活躍する時期が来た。トラクターで開墾し、土を砕き平らにしていく。粉を蒔き、その後から肥やしを撒きちらすのも全部トラクターでやる。手作業で畦を作り、水を流し込んで終了。後は収穫を待つばかりである。

しかし、今さらながらその広さには驚く。一方で青々とした苗が育っているのに、まだ種蒔きすらしていない

い所もあるくらいだった。大陸の暑さは急に四十度以上になり、裸足では外は歩けたものではなかった。

「屋根に小鳥がとまれば焼け落ちる」といわれるくらいである。短期間のうちに植物が育ち、花を咲かせ、実をつける。生きて帰るためにはと、食べられそうな草はすべて食べた。ヨモギ、ハコベ、アカザ、大きくなり蛇苺の実がついて驚いたのもあった。魚の大きいのが小川に泳いでいたが、蝮のような銭形の斑点があり、さすが誰も気味悪がって取ってくる者はいなかった。帰国して後日わかったのだが「雷魚」だった。下手に手を出したら指を食いちぎられていただろうと思う。

作業が一段落したからといって遊ばせるほど甘くない。コルホーズ（集団部落）の作業に引っぱり出された。気が遠くなるような長い長い敵の人参と馬鈴薯の収穫である。人参は生のまま泥を拭いて食べた。甘味があり、お菓子のようなだったが、馬鈴薯だけはいくらか腹が減っていても、えぐいので食べられたものではなかった。

ソ連兵のソルダートが、ポケットにいっぱいセイミチカ（向日葵の種を乾燥させたもの）を持っていて、口に放り込んでパチと割り、上手に実だけを残して殻をペッと吐き散らし食べていた。ソ連では、こんな物がお菓子の代わりである。

ソ連の子供はたくましい。二年半のシベリア生活で、一度も子供の泣く声を聞いたことがない。もともと泣いてもあやしてくれる者もないのだから、泣いても仕方のないことを知っているのだろう。コルホーズの作業帰りのことであった。トラックに馬鈴薯を積んで帰ろうとしているとき、三、四人の年の頃は七、八歳くらいの子供が車の上から馬鈴薯を盗み始めた。監督が怒っても殴っても平気なもので、一人追えば別の者が盗みにかかる。その者を追えばまた別の子がとまるで鬼ゴッコである。監督も腹に据えかねてその子供たちを乗せたまま車を走らせた。子供たちは走る車から飛び降り、ゴロンゴロンと転んだ。ケガをしないかと心配したが、泣くどころか、手を振り上げ「イビヨナ ポッハマーチ（馬鹿野郎）」なんとかかんとか悪口

を怒鳴っていた。

トイレは深さ二メートルくらいの穴を掘り、長さ十メートルくらいのところを丸太を長々と渡し、それに両足を開いて用を足せる幅に細丸木を二本並べて足場にしたもので、まわりは萱で囲い、斜めに屋根をふいて雨風をしのぐといった粗末なもので、もちろん両脇に仕切りなどがある訳でもなく、野郎同士だから恥も外聞もない。

ソ連の煙草でマホルカ（何かの幹や枝葉を乾燥した物で、ちょうど材木を切るときに出るオガクズ状の物である）を新聞紙片にバラバラつとのつけて、くるくると器用に巻き、紙の端を舌でペロリとなめ唾でくっつけて、隣の人に「火をちよっと」とか言って貰い火をしながら、煙草をふかし用を足す。大便の用を足して、紙の代わりに萱の穂を使うなどは当たり前である。零下四十度、五十度の寒さといっても、その寒さは経験した者でなければ考えられないと思う。小学生のときだったか、先生が「大陸の寒さは小便もチンポの先からツララが下がる」なんて話をしたことがあった

が、そんなことはないが、まず地上に落ちるか落ちないかのうちに凍ってしまう。だんだんトイレの方が高くなり山積みになっていく。冬の罰則に便所掃除というのがあった。コッチン、コッチンに凍った大便、小便を鶴嘴で崩してモッコで運ぶのだ。パチンと弾いた便のついた氷が顔にはねる。口についた氷を袖で何気なく拭き取る。汚いなど感じる余裕はない。動物の心理もこんなものかもしれない。日本製の靴で、中に毛のついた防寒靴などはあまり防寒の役に立たない。靴の中にペルチャンキ（足巻布）を巻いても完全ではない。下手をすると凍傷になってしまう。一つだけソ連の物で感心した物がある。ベジンキという靴で、ソ連製の、カートンキという動物の毛を圧搾して作ったサントクロースが履いているような靴だった。これだけは零下何十度の中でも寒さ知らずの最高の履き物だった。だが、いったん濡れると乾かしても駄目で、氷の履き物と化してしまう。

原野でときどき、乗馬の訓練をしているソ連兵を見かけた。ロシアにコザック兵という有名な騎兵隊がい



ることは聞いていたが、実にすばらしい技術である。全力疾走中の馬から飛び下り飛び乗り、馬の背でくると寝て後ろを向き、後ろからの敵を鉄砲で撃つ練習、あたかもサーカスの芸を見ているようであった。しかも零下二十度くらいでは、手袋もかけていない。

冬で悩まされたのに「南京虫とシラミ」がある。作業で疲れて床に入り、とろとろとした頃、チクチクと歯形を二カ所ずつ残して血を吸って逃げていく。その逃げ足の早いこと、明かりをつけたときには姿は無い。また、虱は腹巻き、シャツの縫い目という縫い目に隙間なく卵のオンパレード。爪と爪でパチンパチンと生ぬるいことなどやっつけられない。いらいらして、縫い目を歯でギジャギジャと噛みパチパチと潰してはみる、一部だけの退治にしかならない。月に数度バーニヤ（入浴場）の時間がある。バーニヤに行くとき着ている物を全部脱ぎ浴場に入る。その間に衣服は消毒釜のホルマリン蒸気で熱気消毒され、入浴場の反対側を出るとき受け取るようになっていゝ。入浴と言ってもお湯にざぶんと入るのではない。小桶二杯のお湯で頭

から体を洗う。入浴中のみんなの後ろ姿を見たときには涙が出てきた。肉はほとんどなく、立っている後ろから肛門が見えるのだ。よくもこの体で重労働にたえ、頑張っているものと感心すると同時に、ソ連の、捕虜に対する仕打ちに無性に腹が立つが、敗戦国の立場では、諦めて早くグモイ（帰国）の現実を祈るのみであった。また、ときどき毛を全部剃られるのには参った。陰部の毛などは伸びる際チクリチクリと痛い。

マラリヤに一度だけ悩まされた。マラリヤには「三日熱」、「五日熱」とあり、三日おきに熱が出たり、五日おきに熱が出るのである。私は「三日熱」の方だったが四十度を越す熱が続く、何枚も毛布を掛けたが、ガタガタと震えが止まらず、二、三人で押さえてもおさまらない。なんでも「マラリヤ蚊」という羽に白い斑点のある大きな蚊に刺されるとマラリヤにかかるとか、かかる人とかからない人がいて、帰国してからも発病した人がいると聞いたが幸いにも私は発病しなかった。

私の知る限りのソ連には、まず自由はないし、明日

への希望もなければ、夢も持てない。ソ連人は何のために生きているのかなど考えたことがあるのだろうか。自分の物は何もないのである。家はもちろん、家財から身につける物まで一切国からの貸与品である。すべて平等といえは聞こえはよいが、「共産党員最優先」の平等であるから、ピンからキリまでの差がある。ピンは「天国」、キリは「地獄」が実情である。それを支えるのに「密告」という現実があり、不平や国の悪口を口にしうものなら、友人はおろか、親、兄弟でも密告され、明日はどこに連れて行かれるかわからないのである。

「東京ダモイ」は何度聞かされたか。「スコラダモイ（近々帰す）」は、馬鹿にして働かせる切り札だが、「またか」と本気にしなくなっていた。でも「生きてさえいれば、この生地獄より脱出することもあろう」と希望を捨てずに励まし合った。こんな中で、たくましく、ダモイ後の商いの段取りをしている人がいた。各地方の名産物をメモして「取引き」の話である。北海道出身のこの人は、盛んに名物「ホッケ」の売り

込みをしていた。いつ帰れるかわからない現状であるから、自分を励ます手段だったのだと思う。

シベリアでも、思い出に残る現象を見た。太陽に大きな丸い虹がかかり、その四方に太陽の光が反射し小太陽ができ、その小太陽にまた虹がかかるといったありさまであった。滅入る日常の苦勞も一瞬忘れさせる、夢のような出来事であった。

三度目の冬を越した昭和二十三年の春、「東京ダモイ」ということでサンタヘーゼを出発した。どこに連れていかれるやらと、半信半疑で列車に詰め込まれ、着いた所はモスクワの収容所であった。雰囲気が大分違っている。「今度は本当に東京ダモイだぞ」と少しは信じる気持ちになったが、ここでまたアクチーブ（青年行動隊）とかいう、日本人の赤の洗脳教育者が待っていて、毎日、毎日集められて労働歌を歌わされ洗脳教育を受けさせられた。「タワリッシン（同志）諸君、我々はプロレタリア独裁のソ同盟で、同志レーニン、同志スターリンのお陰で、かつての日本人から生まれ変わったのである。そして帰国後は新生日本の先

頭に立って革命を起こし、「反動政府を打倒し、労働者・農民の政府を樹立する戦士となるためには理論武装が不十分な者を帰国さす訳にはいかん。これからわずかな時間に徹底的に教育するから、一日も早く帰りたい者は一生懸命勉強するように」と、まるで恐喝であった。

レーニン主義の諸問題などは、たしかに、現日本の資本主義、今までの軍国主義のあり方に大いに疑問を持たせる講義ではあるが、ソ連の現状を見てきた我々を、果たして納得させることができるのだろうか。牛や馬のような生活を強制し、自由を束縛して、趣旨に反すれば死刑にもなりかねない制度で縛らなければ統制のとれない国家体制のあり方、夢も希望も持てない思想のみの教育、鉄のカーテンといわれるその一部でも知れば同調できるはずがない。しかし、騙され続けてきて、今、目の前にダモイの餌をぶら下げられては、一時の辛抱、馬鹿になるしかあるまいと、皆と一緒に初めて聞く労働歌「民衆の旗赤旗は、戦士のかばねをつつむ……、高く立て赤旗を……われらは赤旗守る」、

と口をばくばくさせて神妙にしていたため、いよいよ乗船となった。

広場に集められ、関所のようなところを一人一人名前を呼び上げられて、そこを通過して乗船となるのだが、ここでまた一人の不運な仲間を見た。乗船を目の前にして胃痙攣を起こし立てないのである。脂汗で額をびっしょりにして、涙をいっぱい日にためて「俺を置いて帰ってしまうのか」と、すがりつくように手を伸ばすが、呼ばれたら誰の手も借りずに一人で関所を歩いて通らなければならないのだ。その間約十メートル、そこさえ通れば、皆が待っていて助けてやれるのだ、頑張れ、頑張れと励ますが、名前を呼ばれてもとうとう立つことができなかった。胃痙攣がおさまり、次の船に乗ることができただろうか。これも運命のいたずらか、心に残る出来事であった。

舞鶴港で、「ご苦労さん、ご苦労さん」と、手に手に日の丸の旗を振って温かく迎えてくれる人々。二年半ぶりに聞く日本女性のやさしい声もいまだ夢の中のようだった。頭から消毒を受け、シベリアの毒も一掃

し、考えも及ばないほどの優遇に会っても、また帰りの汽車に揺られ、福島に近づくにつれて耳に入ってくる方言訛りの話し声も虚ろな感じだった。郡山駅に着き、駅前に従姉妹が住んでいる家がある。郡山駅前には空襲で、焼け野原だと聞いていたが、それでも訪ねてみたらあった。空襲に遭わずに残っていたのだ。魂の抜けた亡霊のごとく戸をあけて「ご免ください」と声をかけると、ちょうど居間にいた従姉妹とばったり。

従姉妹は一瞬息をのんで、まじまじと私の顔を見ていたが、信じられないといったように、泣くような声で「あらまあ、よく帰って来たな」と一言。私はこの一言で夢から覚めた心地がして、ああ、やっと長い悪夢のような抑留生活に終わりを告げたのだとホッとした。

郡山市内の銭湯に連れて行かれて、全身のシベリアの垢を隅から隅まで、時間をかけて洗い流しながら、よくぞ帰ってこれたと涙が流れた。しかし、シベリア抑留生活の苦しい体験は、「ダモイは嘘だった」と連れ戻される夢の中の脅かしは、二十数年後まで続いた。

帰国後五十数年の生活はさしたることなく、苦労も抑留生活と比較して苦になりませんでした。希望あり、自由あり、自分のために働ける喜びを十二分に味わいつつの人生を過ごしてきた。

ここに、何の因果か苦労ばかりで報われることなく異国の地に永眠されている数多の戦友の御霊に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

#### 【執筆者の紹介】

現住所 福島県田村郡船引町大字船引字町七つ担一五

四一

生年月日 昭和三年七月六日

太平洋戦争中に陸軍少年戦車学校などの中堅幹部養成学校があったことは承知していたが、海軍のことはまったく疎く、横須賀海軍通信学校があって、大室氏が十五歳八カ月で学校を卒業して、明日をも知らぬ戦闘部隊の中に混じって、台湾―上海―北鮮の元山に転進したことに驚いている。童顔の大室氏が親元を離

れるときの両親の胸中を考えると、戦後の人には全く想像できないことだろう。昭和二十三年に復員されてからの経歴の概要は、

1 北海道川上郡弟子屈町にて土木事業、製糖工場に勤務し、さらに将来は自営業を目指したが、長男であるために親元呼び戻された。

2 出生地にて地元の大東銀行に二十年間勤務した後、脱サラを図り茶舗を開き自営業を開業したが、大東銀行の元の上司に囑望されて、同社の子会社として発足した大東商事の保険業務に勤務した。

3 大東商事に勤務、約三年の後、退社し、安田火災海上保険株式会社の代理店として大室損害保険事務所設立、その間に上級の資格試験に合格、現在に及んでいる。

氏の信条は、自己の職場を通して世のため人のために誠意を尽くすこと。この結果、いったん契約をいただいた顧客には、長く継続して取引をいただき、顧客がさらに顧客を紹介して下さって、より広い範囲の新

規の契約ができています。

現在の心境は、「ソ連に抑留された当時の労苦を思えば、どんな苦痛にも耐えられる。あの苦しみは神の与えて下さった試練であったと感謝している」とのことである。日本の高度成長期以後は豊かになり過ぎて、物質にのみ走り精神面を忘却している、自分のみ生きられれば良いというのではなく、相互扶助の精神を高揚しなければならぬと言われる。

開業以来、優良事業所として優秀な成績をあげられ、整えられた顧客網と共に繁業を続けている。そのため、世間一般では後継者難に陥っている事業が多い中で、次男元秀さんが事業を継承すべく研鑽を積んでいる。

(福島県 熊田 正雄)

## シベリア回顧録

千葉卓 伊藤千次

昭和二十年八月の初め、中国漢口第十五航空通信連